Ⅱ

2023

国　語

注　　意

1．試験時間は，8：50 ～ 9：40 の **50 分**です。

2．問題は 一 から 三 まであります。

3．解答用紙に，受験番号と氏名を書きなさい。

4．解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。

5．先生の指示があるまで，問題用紙をあけてはいけません。

6．問題についての質問はうけつけません。

7．試験が終わったら，解答用紙を裏返しにしておきなさい。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

卓球に打ち込む日々を送っていた中学三年生の松野亜樹は、友人の藤本さんと高校見学のために文化祭の日を選んで出かけた。そこで今年の三月に卒業した卓球部の先輩である池橋先輩に再会した。

あのとき、亜樹が制服(注1)のリボンをくださいとたのむと先輩は、こういって断ったのだ。

「松野さんがわたしのリボンをほしがるとは思えない」

①図星だった亜樹には、痛い言葉だった。すごすごと、ひきさがるしかできなかった。

「ねえねえ、わたし、今、映画研究会にいるのね」

先輩がうきうきした感じで、亜樹と藤本さんにチラシをわたす。

「もしよかったら、十一時から視聴覚室でやるから、よろしくね！」

「あっ、はい、ありがとうございます」

亜樹がそういって頭をさげると、池橋先輩は手をふって「待ってるよぉ」といいながらはなれていった。

「うちの学校の先輩？」

ぼんやりしてると、藤本さんが亜樹の顔をのぞきこんでいった。

「うん、卓球部の先輩。今年の卒業生」

でも先輩は卓球をしていたころとは、Xずいぶん感じがちがっていた。

「じゃあ、わたしたちよりいっこ上なだけなんだ。なんか、おとなっぽいね」

「うん、感じがかわっちゃって一瞬、全然思いだせなかったよ」

長い髪をばっさり切ったせい？　制服のせい？　このお祭り騒ぎのせい？

「この映画、見にいってみようか。時間も、もうすぐだし」

「う、うんA……そうだね」

亜樹はそう返事をしながらも、じつはあまり気が進まなかった。
それでも迷路のような校舎をうろうろして、ようやく視聴覚室を見つけだす。すでに部屋は暗くなっていて、亜樹たちはあわてて空いてるイスにすわった。
亜樹はすわって落ち着くと、卒業式のことを丁寧に思いだした。
「卓球部女子では、リボンをほしがってもらえないかわいそうな先輩が、ひとりもいないようにします！」
あのとき亜樹たちは、竹中のアイデアに賛成して、どの先輩からリボンをもらうかをジャンケンで決めたのだ。そのアイデアにだれもなんの疑問もいだかなかった。わたしたちはなんてやさしい後輩なんだろうと、［　I　］していたくらいだった。
「わたし、尊敬する池橋先輩のリボンがほしいんです！」
だけど亜樹はリボンはもらえなかった。
「尊敬してるなんてありえないよ」
もし来年の卒業式で自分が後輩に同じセリフをいわれたら、自分だって池橋先輩と同じことをいうだろう。だって、彼氏もいないし、最後の試合は一回戦負けだし、絶対にありえないから。
亜樹は上映されている映画をぼんやり見ながら、あのときのことを初めて深く反省した。同じ立場に立った今だから、わかったことだ。義理でリボンをほしがってもらっても、ちっともうれしくない。むしろ、後輩にそんなことといわれたら、むかつくだけだ。
映画上映中、亜樹はそんなふうに自分のおかした罪をくやむばかりで、ストーリーなんて全然頭にはいってこなかった。
それでも映像の中の池橋先輩が気になって、スクリーンだけは食いいるように見つめていた。だけど最後まで池橋先輩の姿を見つけることはできなかった。ただ最後にスタッフのひとりとして、名前だけが紹介されていた。
②せめて主役なんかで登場してくれたら、この悔いる気持ちも少しは楽になったのに……と考えた自分が、またすぐにイヤになる。
「亜樹、終わったよ」
亜樹が肩を落としてうつむいてると、藤本さんが心配そうに顔をのぞきこんでいった。
「具合わるくなっちゃった？」
「えっ、うんん、大丈夫。いこっか」
亜樹はあわてて顔をあげて、笑顔を作った。ふたりで同時に立ちあがって部屋をでようとすると、池橋先輩が入り口で「ありがとうござ

いました！」とさわやかにお客さんにあいさつをしている姿があった。
亜樹は気まずくてにげだしたくなった。
「あっ、松野さん！　見にきてくれたんだ。ありがとうね」
そんな亜樹の気持ちなど知るよしもない先輩が、うれしそうにかけ寄ってくる。
亜樹はとっさに「おもしろかったですぅ」といいそうになって、③あわてて飲みこんだ。
先輩にaうかつなことはいえない。亜樹があいまいな笑顔をむけてると、先輩がいった。
「松野さんは、この高校にきたいの？」
「いえ……まだ、どこにいきたいとかわからなくて……」
亜樹は素直に今の気持ちをつたえた。
「わたしは、ここに映画研究会があるの知って、絶対にここにきたいって思ったんだ。そのうち、監督（かんとく）がやれるようになりたいんだよね」
「監督、ですかB……」
「まだ、先輩のおてつだいしてるだけだけどね」
先輩はそういうと、ペロッと舌をだして、はずかしそうに笑った。
亜樹がなんて言葉をかけていいかまよっていると、意外にも藤本さんが口を開いた。
「将来は映画監督になるんですか？」
「あくまで夢だけどね」
でもその言葉にまよいはなかった。
「わぁ、すごいですね！」
藤本さんが感動すると「なれたら、すごいよね」と④頭をぽりぽりかいていた。
「じゃあ、わたしはかたづけあるから、きてくれてありがとね」
そして先輩はいそがしそうに、ふたりからはなれていった。亜樹はそのうしろ姿をぼんやりと目で追った。
「格好いい先輩だね」
「うん……なんか、びっくり……」

亜樹たちはあとかたづけのじゃまにならないように、その場から少しはなれた。生き生きしている先輩をもう少し見ていたくて、亜樹は歩きだせずにいた。

将来の目標がきまっていて、それに向かってがんばっていると、あんな風に輝(かがや)けるものなのかと、亜樹はその姿がまぶしくて、うらやましくて、目がはなせなくなっていた。

「あのねC……」

そんな自分の気持ちをだれかにきいてもらいたくて、亜樹は藤本さんに卒業式におかした自分の罪と⑤今の気持ちを白状した。ひどいと思われてもいいと思った。もう自分の内側には閉じこめておけなくて、美佳(みか)にダブルス(注2)を解消されたことや、夏の大会で負けたこともふくめて、すべてを吐(は)きだしてしまった。

藤本さんはしずかに、亜樹の話をきいてくれた。

「でも、気づけてよかったね」

亜樹の話をきき終わると、藤本さんがいった。

「試合で負けたのはくやしかっただろうけど、でもそのおかげで池橋先輩の気持ちに気づけたんだから、それはすごくいいことだと思うよ。弱い人の気持ちがわかったんだもの」

亜樹は池橋先輩から目をはなして、藤本さんを見た。

「だから、負けてよかったんだよ」

藤本さんがきっぱりという。

「負けてよかったD……」

自分でも口にだして、くり返してみる。

「そう、よかったんだよ」

負けることはちっともよろこばしいことじゃないはずなのに、藤本さんのその言葉には説得力があった。

「そっか……」

亜樹はうなずきながらも、まだ少しぼんやりしていた。負けてよかったなんて、初めてきいた言葉でまだイマイチなじめなかったから……。

「あっ、なんかやってるよ」

藤本さんは明るい笑顔をむけると、亜樹の腕(うで)をつかんだ。

「あっちにいってみよう！」

藤本さんにひっぱられて、急ににぎやかになった中庭にむかう。亜樹はつかまれた腕を見ながら、藤本さんのあとを追った。急に積極的になった藤本さんに、亜樹はとまどっていた。

中庭では、ピエロの格好をした男の子たちが、一輪車に乗ってなにかさけんでいる。ピエロのb滑稽(こっけい)な動きを見ながら、亜樹は心の中でくり返してみた。

⑥負けてよかった。負けなきゃ、わからなかった。だから、よかった。

（草野たき『リボン』による）

（注１）制服のリボン…亜樹の学校では卒業式の際にあこがれの先輩からリボンをもらうという風習がある。

（注２）ダブルス…二人対二人の四人でする試合。ここでは、その試合に出場する二人組を指している。

問一　波線部a・bの言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

a　うかつな

ア　いつわりのないさま
イ　当てにならないさま
ウ　現実味のないさま
エ　注意の足りないさま
オ　説得力のないさま

b　滑稽な

ア　大げさですばやいさま
イ　品性がなくくだらないさま
ウ　おもしろくおかしいさま
エ　よく洗練されているさま
オ　思わず考えさせられるさま

問二　傍線部①「図星だった亜樹には、痛い言葉だった」とありますが、このときの亜樹の気持ちとしてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　本心から池橋先輩のリボンをほしがっているわけではなく、それを見破られてしまい気まずい気持ち。
イ　後輩が人気のない自分を気づかっていることに、気がついてしまった池橋先輩を気の毒に思う気持ち。
ウ　自分以外の人がお願いしていたら、池橋先輩も喜んでくれたのかもしれないと自信を失う気持ち。
エ　池橋先輩のためを思ってたのんだのに断られてしまい、この計画を考えた人を責める気持ち。
オ　もともと好きではなかった池橋先輩に拒絶されたことで、余計に嫌悪感が増していく気持ち。

問三　空欄Ⅰに入る四字熟語としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　一念発起　　イ　我田引水　　ウ　自画自賛　　エ　心機一転　　オ　創意工夫

問四　傍線部②「せめて主役なんかで登場してくれたら、この悔いる気持ちも少しは楽になったのに……」とありますが、なぜ亜樹はこのように考えたのですか。七十五字以内で説明しなさい。

問五　傍線部③「あわてて飲みこんだ」とありますが、なぜ飲みこんだのですか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　おもしろかったというありきたりな言葉ではなく、もっと先輩が喜んでくれるようなほめ言葉を考えようと思ったから。
イ　軽はずみに嘘をついてしまうと、本心ではつまらなかったと思っていることに気づかれてしまうのではないかと思ったから。
ウ　かつて先輩がリボンを断ったことをまだ恨んでおり、そんな相手に対してほめ言葉を口にするのが悔しくてためらわれたから。
エ　池橋先輩と同じ立場になってはじめて義理で言葉をかけられる不愉快さが分かり、慎重に言葉を選ぶべきだと思ったから。
オ　映画に集中できず内容がよくわからなかったため、自分の抱いた感想が映画の内容と合っているか自信がなかったから。

問六　傍線部A～Dの「……」について、それぞれの表現効果を説明した文としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　Aは、亜樹が本当は別に行きたいところがあるということを言い出せずにためらっている様子を表現している。
イ　Bは、身の丈に合わない大きな目標を掲げる池橋先輩を恥ずかしく思い、しらけている様子を表現している。
ウ　Cは、自分の過去を藤本さんに白状したら嫌われることが分かっており、覚悟を決めている様子を表現している。
エ　Dは、藤本さんが自分には想像もつかなかった返答をしたため、すんなり言葉を飲みこめない様子を表現している。

問七　傍線部④「頭をぽりぽりかいていた」とありますが、このときの池橋先輩の気持ちとしてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　自分の夢に対して亜樹や藤本さんがお世辞を述べていることに気がつき気まずく思う気持ち。
イ　今の自分とはまだほど遠い目標を掲げることを照れくさく思いつつも誇りに思う気持ち。
ウ　中学時代は卓球部であったのにその頃と関係のない夢を持っている自分を恥ずかしく思う気持ち。
エ　以前と変わらず目立たない人間である自分が夢を語ったら二人がどう思うか不安に思う気持ち。
オ　実現が難しい大きな夢のはずなのに二人が思いのほか素直に受け入れてくれて動揺する気持ち。

問八　傍線部⑤「今の気持ち」とありますが、ここでの「気持ち」の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　藤本さんが自分のことを心配してくれているのに、池橋先輩との関係を隠していたことを申し訳なく思う気持ち。
イ　同じ立場だと思っていた池橋先輩と自分の違いを目の当たりにして、誤解していた自分を恥ずかしく思う気持ち。
ウ　部活がうまくいかず自信が持てない自分とは対照的に、やりたいことにまっすぐ向き合う池橋先輩に憧れる気持ち。
エ　池橋先輩が尊敬できる存在であったことに気がつき、以前失礼な態度をとってしまった自分を責める気持ち。
オ　中学時代とは打って変わって池橋先輩が輝いており、自分だけが取り残されているようで妬ましく思う気持ち。

問九　傍線部⑥「負けてよかった」とありますが、どういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問十　二重傍線部X「ずいぶん感じがちがっていた」とありますが、なぜ「ちがっていた」のでしょうか。本文全体から読み取れることをふまえて、三十字以内で考えて説明しなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、作問の都合で本文に手を加えた部分があります。

「思考」と「表現」はひとつなぎ

文章を書くことには、どのようなイメージがあるでしょうか。

時間がかかりそう、骨が折れそう、難しそう……宿題で読書感想文のマス目を必死で埋めたことなどを思い出し、苦労した記憶が蘇ってくる人も多いかもしれません。

たしかに、文章を書くのは、誰にとってもそれ相応の労力を要するものです。ある程度まとまった文字数を書こうとすれば、それなりに時間もかかりますし、エネルギーも使います。必ずしもスラスラと進むことばかりでもaないでしょう。

Ⅰ、文章を書くことには、その行為自体に価値があります。

かけた労力を大きく上回るような(注1)リターンがあるのが、文章を書くということなのです。

私は大学で(注2)教鞭をとっていますが、クラスの学生たちには長年、「エッセイを書く」という課題をやってもらっています。毎週一回、エッセイを書いてもらい、決まった曜日に提出してもらうのです。

学生たちは、提出の曜日が近づくたびに、そわそわと落ち着かbなくなるそうです。

でも、提出した後は一転、「書いてよかったです」と口をそろえます。「書くことで考えがはっきりしました」と、表情まで晴れやかになるのです。

私は、ここに「文章を書く」ことの本質があるのではないかと思っています。

Ⅱ、「書くことで自分の考えがはっきりする」というのが、文章を書くことの最大のリターンではないかと思うのです。

ここまで読んで、①「あれ?」と思った人もいるかもしれません。

(中略)

でも、本書でお伝えするのは、基本的には「考えながら書く」「書きながら考える」というやり方です。いってみれば、パソコンのキーボードで自分の考えを打ちこみながら、打ちこむ手を止めずに考えるといったようなことなのです。

そもそも、②「考えること」と「書くこと」とは、その2つの間に線を引いて、きっちりと分けられるようなものではありません。書くこともまた、思考の一部といえるからです。

（中略）

(注3)語彙の豊かさは、人間的な豊かさ

③話し言葉では、表情や声色、身振り手振りなどがプラスアルファの表現として加わりますが、書き言葉には、こうした要素がありません。言葉のみで表現する必要があります。

Ⅲ、話し言葉をそのまま文字に起こしたものを読むと、的確な言葉が使われていなかったり、説明が足りなかったりして、結果として内容がきちんと伝わってこc ないという印象になるわけです。

事実、書き言葉の語彙数は、話し言葉の語彙数をはるかにしのぎます。

国語辞典に掲載されている何万という言葉のうち、「この言葉は話しているときにも普通に使うな」と思うものは非常に少ないはずです。おそらく５００語、多くても１０００語ほどで事足りてしまう。ひとつの会話の中だけでいえば、せいぜい20語くらいでしょう。

となると、さまざまな言葉を駆使し、表現を工夫しなければいけない書き言葉は、少しの言葉ですむ話し言葉よりも不便なものに思えるかもしれません。

でも、本当にそうでしょうか。

書くという行為には、たしかに一定の労力が必要です。

「言葉のランタン(注4)」を使って自分の思考や感情を明らかにしていくのは、ワクワクする反面、疲れることでもあります。

ただ、この労力を払うことで思考力は確実に磨かれます。

④シンプルにいえば「頭がよくなる」のです。

「やばかった！」が「素晴らしかった！」に変わる瞬間

日常的に「書く」ということをしていると、実は普段の話し言葉も磨かれていきます。

話し言葉と書き言葉とでは、語彙の数が違うとお話ししましたが、文章を書くということが常態化してくると、次第に、書くときに使っている言葉が話しているときにも口をついて出るようになるのです。

たとえばスポーツ観戦で、ファインプレーを目撃したとしましょう。

「あのプレーは、やばかった！」

「あのプレーは、素晴らしかった！」

前者は話し言葉にしか使えませんが、後者は、話し言葉としても書き言葉としても通用します。

つまり、「書く」ことを通じて語彙力が磨かれると、書き言葉と話し言葉の距離が近くなっていき、「話すように書く」ことが、徐々に「書くように話す」こととイコールになっていくのです。

以前は「すごく驚いたこと」を「まじでびっくりした！　やばかった」と言っていたのが、「驚愕した」「驚きのあまり開いた口が塞がらなかった」といった表現に置き換わる。

⑤「とても美味しいこと」を「めっちゃうまい！　やばい」と言っていたのが、「この味は絶品だ」「格別な味だ」といった表現に置き換わる。こうした表現が自然に口から飛び出すようになるでしょう。

書くときでも話すときでも、思考や感情を言葉で豊かに表現できる人は、自分自身を深く理解している人ともいえます。そして、その深い理解をもとに、的確に表現することができれば、より深く人ともつながれるようになるでしょう。

言葉が磨かれることで、自分という人間も、自分が生きる人生も豊かになるという循環が起こるのです。

（齋藤孝『書ける人だけが手にするもの』による）

（注１）リターン…見返り。

（注２）教鞭をとる…教師として教えること。

（注３）語彙…使用される言葉の量。

（注４）ランタン…暗がりを明るくする道具。ここでは比喩として用いられている。

問一　空欄Ⅰ～Ⅲに入る言葉として適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア　つまり　　イ　たとえば　　ウ　ですから　　エ　それでも　　オ　そして

問二　波線部a～dの言葉の中で、はたらきの異なるものを一つ選んで、記号で答えなさい。

問三　傍線部①「『あれ？』と思った人もいるかもしれません」とあるが、なぜ「あれ？」と思うのですか。六十字以内で説明しなさい。

問四　傍線部②「『考えること』と『書くこと』とは、その２つの間に線を引いて、きっちりと分けられるようなものではありません」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　文章を書くには話し合いが不可欠であり、他者との関わりは自らへの問いかけを生み出すことができるということ。

イ　書くことは多様な表現を知り知識を増やしていく行為であり、自分の考えを広げるための手段であるということ。

ウ　思考することは「何を書くか」という表現の入り口にも関わる不可欠な要素であり、思考なしには書けないということ。

エ　言語化することはあいまいな状態である思考を確定させていく過程であり、思考の根本には言語化があるということ。

オ　話すことは書く行為よりもずっと適切な文章が求められるものであり、深く思考を巡らせる必要があるということ。

問五　傍線部③「話し言葉」とありますが、本文中で述べられている話し言葉の特徴の説明として適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　頭の中での思考を経ることなく表現されるため、語彙が少なかったりうまく説明できなかったりすることがある。

イ　言葉だけではなく身体的な表現も重要な役割を担うため、言葉足らずな表現でもそれを補うことができる。

ウ　伝達内容をあいまいな言葉で表現するため、話し手と聞き手の間で誤解を生みやすく便利なものではない。

エ　使用できる語彙の量が大きく制限されるため、ごくわずかな言葉を駆使して伝えたいことを表現する必要がある。

オ　話し言葉は書き言葉と異なり基本的には保存されず一度限りのものであるため、工夫を凝らす必要はあまりない。

問六　傍線部④「シンプルにいえば『頭がよくなる』のです」とありますが、なぜ書くという行為をすると「頭がよくなる」のですか。話し言葉と比較しながら九十字以内で説明しなさい。

問七　傍線部⑤『とても美味しいこと』を『めっちゃうまい！　やばい』と言っていたのが、『この味は絶品だ』『格別な味だ』といった表現に置き換わる」とありますが、「置き換わる」とどのような効果があると筆者は考えていますか。六十字以内で説明しなさい。

問八　次の文章は、ある生徒の作文学習の学びを説明したものです。筆者が述べている書くことの学びに合わないものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　友人と互いの作文を読み合ったことで他の人に読ませる意識が高まり、字を丁寧に書くようになった。
イ　辞書で多様な言葉を調べて用いながら作文をした経験により、日常生活における語彙も増加した。
ウ　書く経験によって物事をより正しく言語化できるようになり、自分自身の考え方により自覚的になった。
エ　心情を表現するにあたって、喜びを表す語群とその使い方の違いを調べ、よりふさわしい言葉を見つけた。
オ　出来事を文章にしていく中で状況が整理され、書くまでは得られなかった新たな発見が生まれた。

問九　本文の特徴の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　カタカナ語を多用しており、日本語に留まらない多様な言語における作文の価値まで暗示している。
イ　書き言葉らしい堅苦しい表現を多用することで、作文が苦手な読み手に見本を示す筆者の意識が見られる。
ウ　読み手にとって身近な例を挙げることで、読み手が自分に関わることとして文章を読めるような工夫をしている。
エ　「でしょう」という文末表現を繰り返し使っており、読み手に強くテーマを印象付けたい筆者の意図が見てとれる。
オ　話し言葉と書き言葉を具体的に比較しながら、話し言葉を丁寧にしていくことの重要性を説明している。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

① 理科でメダカのサンランを観察する。
② 列車や自動車はコウテツでできている。
③ 夏休みに出かけてリョカンに泊まった。
④ 下町のウラドオりには昔ながらの店がある。
⑤ 全校生徒の前で発表したが、失敗せず無事にスんだ。

〔国語〕

解答用紙

注意　字数制限の問題では、句読点も一字として数えます。

一	問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九
	a								
	b								

二	問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九	問十
	I									
	II									
	III									

三	問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九

①			
②			
③			
④			
り			
⑤			
んだ			

受験番号		フリガナ	
		氏名	

得点	

国語　解答用紙

注意　字数制限の問題では、句読点も一字として数えます。

一

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九	問十
a	ア	ウ	尊敬し ていた ことを 悔やん で先輩 の敬愛 をつい ぬぐえ ると思 ったか ら。	エ	エ	イ	ウ	亜樹は負けたことを先輩を傷つけたことができたと価値があると思ったこと付くことになるかもしれないという将来の目標に映画監督になりたいという夢を抱いているから。	
エ									
b									
ウ									

二

問一	問二	問三	問四	問五
Ⅰ	α	書くことは、頭の中にまず考えがあるのではなく、文章にしていくのである。	対象を言語化する際、書き言葉は明確化するものである。	イ
エ				エ
Ⅱ				
ア				
Ⅲ				
ウ				

三

問六	問七	問八	問九
自分の考えを明確化するために、深く自分を見つめ、言葉を選んで話すことが必要だから。	人生がより豊かになるとい うことは、深く自分を見つめ、言葉を選んで話すことが必要だから。	ア	ウ

①	産卵
②	鋼鉄
③	旅館
④	裏通（り）
⑤	済（んだ）

受験番号	
フリガナ	
氏名	

得点	